

國學院大學學術情報リポジトリ

『蜻蛉日記』安和の変直後の長精進と病臥：
正五月と閏五月の対応

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 菜穂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000809

『蜻蛉日記』安和の変直後の長精進と病臥

—正五月と閏五月の対応—

斎藤 菜穂子

キーワード

安和の変 長精進 山籠り 病臥 閏五月

一、はじめに

『蜻蛉日記』中巻における安和二年三月の安和の変についての記述は、政治に関わることを書かないこの作品において、きわめて特異である。従来それは、夫婦関係に嘆きを抱いている道綱母が、左遷された高明やその悲嘆の中で尼になった愛宮に対し、ともに悲しみに在る者としての同情を掻き立てられたからという視点で論じられてきたが、本稿では、この事件直後の五月と閏五月の条が対構造になっていることを指摘し、当時の貴族社会を騒然とさせた安和の変をめぐる記事の存在意義について新たな見解を述べたい。

二、兼家の長精進

安和の変の記事の最後から本文を引用する。

『蜻蛉日記』安和の変直後の長精進と病臥

I、そのころほひ、ただこの事にてすぎぬ。身の上をのみする日記には入るまじき事なれども、悲しと思ひ入りしも誰ならねば、記しおくなり。

(a) 其前の五月雨の (b) 廿余日のほど、物忌もあり、ながき精進もはじめたる人、山寺にこもれり。雨いたく降りて、(c) ながむるに、「いとあやしく心細き所になん」などもあるべし、かへりごとに、

時しもあれかく五月雨の水まさりをちかた人の日をもこそふれ

と物したる返し、

ましみづのましてほどふる物ならば (d) おなじぬれにておりもたちなむ

といふ程に、閏五月にもなりぬ。

(中巻・安和二年三月～五月)

この三月二十五日の政変について「悲しと思ひ入りしも誰ならねば」と、自分自身が悲しく思ったので記したとの釈明に続いて、「五月」になったとし、長精進している夫兼家を描く。兼家が描写されるのは中巻冒頭一月以来である。一月二日に道綱母と時姫の従者間に諍いがありその後道綱母は転居して、夫兼家は「わざときらぎらしくて日ませなどにうち通ひたれば」と書かれたのだが、それ以降これまで、安和の変の直前も安和の変の時も、兼家に触れない。また久しぶりに兼家について記すこの五月の記事においても、兼家は「山寺にこも」っているものであり、道綱母と会っていない、また会えない状況とされている。

その兼家から便りが来る。兼家は道綱母に、「二重傍線部「いとあやしく心細き所になん」と心細さを訴えている。雨がひどく降っているなか、傍線(c)「ながむるに」とあるように道綱母がもの思いにふけている時に届けられたのであり、雨中のこの「ながむるに」と、そのような折の山籠りにおける兼家の「いとあやしく心細き所になん」は、離れていても同じように心許ない心情の中にふたりがいたことを表わしている。「雨いたく降りて」からを兼家の手紙と解する注釈書も存し⁽²⁾、そうも読めるように、ここではふたりの心情が重なるように描かれているのである。

この記事は次の条を想起させないだろうか。

十二月になりぬ。横川にものすることありて登りぬる人、「雪に降りこめられて、いとあはれに恋ひしきこと多くなん」とあるにつけて、

こほらん横川のみづに降る雪もわがごと消えてものは思はじ

などいひて、その年はかなく暮れぬ。

(上巻・天曆八年十二月)

兼家が山籠中で会えない状況であること、「雪」(雨)がひどく「降」っていると描かれていること、兼家から便りがあること、そしてその天候と重ねられて手紙や詠歌が描かれること、そして兼家は手紙で道綱母へ甘えるように思慕を述べていること。これらの要素がふたつの記事において共通すると指摘できる。

この上巻の記事は結婚が成立して数ヵ月後、兼家の手紙は新妻へ恋しさを伝えるもので、道綱母はそれに和歌で自分こそが切ない物思いをしているのだと切り返し、逆説的に思慕を表わしている。中巻の当該部は結婚して十五年が経っており、兼家が道綱母へ気弱な心地を述べ、道綱母は「あなたがお籠りのちようどその時に五月雨の水が増して、遠方のあなたは何日も帰れなくなってしまうのではないでしょうか」と、夫を心配ししばらく逢えない寂しさを伝えている。

当該記事は上巻の「横川」の条と同じく、夫の寺院参詣のためそして距離的にも遠く離れて逢うことの叶わない夫婦が相手への愛情を示す内容であり、また上巻の例よりも道綱母が素直に夫への思慕を表わしている。この「時しもあれ」歌のように夫への愛情を反発的にでなく表現する道綱母の和歌は、上巻康保三年三月の兼家急病時における「われもさぞのどけきとこのうらならでかへる波路はあやしかりけり」という非常の折くらいで、『蜻蛉日記』にはきわめて少ない。当該部は新婚期の記事を彷彿とさせ、またそれ以上に夫への思慕を表わす記事となっていることに注意したい。

また当該記事では上巻の例とは異なり、続いて兼家の返歌「ましみづの」歌が記されていることは看過できない。この歌の第四句は底本をはじめとする古本系諸本が「おなじぬれにて」「傍線(d)」なのだが、このままでは読解できないとして従来「おなじぬまにて／おなじぬまにも」と改訂されてきた。しかし近年今西祐一郎によって、これは「一味の雨」という仏典由来のことばを元にした表現であることが見出されたのであり、従いたい。兼家は仏典を典拠として、「万物に平等に降り注ぐ仏の教えの雨に濡れて、君のもとに下山しよう」と妻に頼もしく応えているのだ。

当該記事では、兼家の長精進の山籠り時、しばらく会うことのできない状況下での夫婦の心の通い合いが描出されている。

三、道綱母の長患い——「蓮の実一本」と独詠歌

右の記事に続く本文を引用する

II、^(e) つごもりより、何ごこちにかあらん、そこはかどなくいと苦しけれど、さはれとのみ思ふ。^(甲) 命惜しむと人に見えずもありにしがなとのみ念ずれど、見聞く人ただならで、^(イ) 芥子焼きのやうなる業すれど、なほしるしなくてほどふるに、人は^(g) かくきよまはるほどとて、^(h) 例のやうにも通はず、新しき所つくると通ふたよりにぞ、⁽ⁱ⁾ 立ちながらなどものして、「いかにぞ」などもある。こち弱くおぼゆるに、^(ロ) 惜しからで悲しくおぼゆる夕暮に、例の所より帰るとて、^(j) 蓮の実一本を、人していれり。「暗くなりぬれば、参らぬなり。これ、かしこのなり。見給へ」となんいふ。返りごとには、ただ、「生きて生けらぬ」と聞えよ」といはせて、思ひ臥したれば、あはれ、げにいとをかしかなる所を、^(k) 命も知らず^(l) 人の心も知らねば、「いつしか見せん」とありしも、さもあらばも、止みなんかしと思ふもあはれなり。

花に咲き実になりかはる世を捨ててうきはの露と我ぞ消ぬべき
 など思ふまで、日を経て同じやうなれば、心細し。よからずはとのみ思ふ身なれば、^(丙) つゆばかり惜しとにはあらぬを、ただ、この一人ある人いかにせんとばかり思ひ続けるにぞ、涙せきあへぬ。
 (中巻・安和二年閏五月)

先の記事の最後「閏五月にもなりぬ」をうけ、「閏五月」傍線(e)「つごもりより」道綱母の体調が悪くなったとある。不調の理由はよく分からず、家族の心配によって傍線(f)「芥子焼きのやうなる業」と加持祈祷を受け、兼家の見舞いを記すのだが、傍線(g)「かくきよまはるほど」は、「きよまはるほど」なのは兼家が道綱母か解積が分かれているところ⁽⁴⁾で、兼家の身の慎しみと道綱母の病臥を重ねて解せるように書かれていることに注意したい。そのような時、傍線(h)「例のやうにも通はず」と、兼家がいつものようには訪れないと述べる。「例のやうにも通はず」とは、それまでの「例」は比較的頻繁な訪れだったとなろう。この表現は、先述した同年一月頃の「日まぜなどうち通ひたれば」を受けるもので、本邸を持ち時姫という妻がありながらの「日まぜ」の通いは、道綱母を概ね満足させるものだった。また、訪れた兼家が傍線(i)「立ちながら」の状態であることに道綱母は不満を表わさないのであり、兼家が自分を遇するあり方を順当なものとして捉えている。

ここで「新しき所」と新邸造営について触れられる。兼家は新邸の傍線（j）「蓮の実一本」を道綱母に送ってくる。それを見て道綱母が思うのは、「本当にとても素晴らしいと聞く邸宅を、自分の命の今後もある人の心の今後もどうなるかわからないので、「すぐに君を住まわせよう」と言っていたのも、命が尽きたり心変わりになったら取りやめになってしまうのだわ」とのことだ。「いつしか見せん」は、「早く見せたい」（『新編日本古典文学全集 蜻蛉日記』）との解と、「一時も早く（道綱母を）住まわせよう」（『新日本古典文学大系 蜻蛉日記』）との解が存するのだが、「蓮の実一本」や道綱母の独詠歌の内容と合わせると、後者が妥当である。兼家が、病に臥している道綱母に造営中の新邸の「蓮の実一本」を贈ったのは、それと彼女を結縁させて元気づけようと思ったからであって、それは道綱母に単に新邸を見せたいのではなく、そこに彼女を迎え取することを前提としての行為と考えられる。⁽⁵⁾道綱母はこのままの状況だったら新邸行きが叶ったはずと思っっているのだ。

当該部には「惜し」という語がここまで三例、波線（甲）（乙）（丙）が存する。これらはすべて「惜しくはないこの身」という表現であり、繰り返し用いられて、病のため新邸入りせず世を去らねばならないことを甘受しようとしているのを読者に印象づける。波線（乙）の「惜しからで悲しく」は、「惜しからで悲しきものは身なりけり憂き世そむかん方を知らねば」（『後撰集』一一八九）・「惜しからで悲しきものは身なりけり憂き世を捨てんかたしなれば」（『古今六帖』二二一六）・「惜しからで悲しきものは身なりけり人の心のゆくへ知らねば」（西本願寺本『貫之集』下・第六⁽⁶⁾）のように典型化されていた和歌表現「惜しからで悲しき（ものは身なりけり）」が引き出されたもので、それを介して傍線（i）「人の心も知らねば」と、右記の西本願寺本『貫之集』の歌の一節が浮上したという機制になっている。

しかし、この傍線（i）「人の心も知らねば」という表現はごく一般的な言い回しであって、特定歌の引歌表現とせず読解が可能だ。表現としてより重視すべきは、夫の「この蓮は新邸のだよ、ごらん」という言葉に、「あはれ、げにいとをかしかなる所を」と新邸への執着が発露し、傍線（k）「命も知らず」と傍線（l）「人の心も知らねば」との思いが対になってあらわれることである。そして「命も」「人の心も」長続きしなければ新邸入りは叶わないと病の身で悲観されるという文脈になっている。続く独詠歌では、「花に咲き実になりかはる世を捨てて」自分は死んでしまうのだからと詠じており、このまま生き長らえたら「花に咲き実になりかはる世」を享受できるはずなのにと考えていることが示唆されている。波線（甲）（乙）（丙）の「惜し」の用例はみな、「惜しくはないと思うのだが

「とあるもので、それに続けて家族の指示による加持祈祷に触れたり、夫の新邸からの贈り物を記したり、道綱の今後への願いを表わしたりと、道綱母をこの世へつなぎ止める事柄が描き取られていた。病いの心細さのなか、命も夫の心もどうなるか分からず、「惜しくはない」自分と述べながらも、「花に咲き実になりかはる世」を過ごせるはずの我が身として執着をにじませている。

この閏五月、道綱母は病の床で「惜しくはないと思うのだが」と繰り返し未練を表わしており、新邸に入ることが心の内で期待され執着されていたのだった。道綱母と兼家の関係はこの時点で良好であると認められる。

四、道綱母の長患い——遺書

先の引用部に続く記事をあげ、道綱母の遺書の意味するところについて考察する。

Ⅲ、なほあやしく、例のここに違ひておほゆる気色もみゆべければ、^(m)やむごとなき僧など呼びおこせなどしつ心みるに、さらにかにもいかにもあらねば、かうしつ死にもこそすれ、俄にては思しき事もいはれぬ物にこそあなれ、かくて果てなば、いと口惜しかるべし、ある程にだにあらば、思ひあらむに従ひても語らひつべきを、と思ひて、脇息におしかかりて、書きけることは、

「⁽ⁿ⁾命なかるべしとのみのたまへ、^(o)みえてたてまつりてむとのみ思ひつつありつるを、限りにもやなりぬらん、あやしく心細き心地のすればなん。常にきこゆるやうに、世にひさしきことのとと思はずなれば、ちりばかり^(p)惜しきにはあらで、ただこの幼き人のうへなん、いみじくおほえ侍るものは、ありける。たはぶれにも御気色の物しきをば、いとわびしと思ひてはんべめるを、いと大きなことなくて侍らんには、御気色など見せ給ふな。いと罪ふかき身にはべらば、

風だにも思はぬかたによせざらばこの世のことはかの世にもみむ

侍らざらん世にさへ、うとうとしくもてなし給ふ人あらば、つらんくなんおほゆべき。年ごろ、御覧じはつまじくおほえながら、かはりもはてざりける御心を見給ふれば、それいとよくかへりみさせ給へ。ゆづりおきてなど、思ひ給へつるもしるく、かくなりぬべかめれば、いと長くなん思ひきこゆる。^(d)人にも言はぬことの、をかしなできこえつるも、忘れずやあらんとすらん。^(q)折しもあれ、対面にきこゆべきほどにもあらざりければ、

露しげき道とかいとど死出の山かつがつ濡るる袖いかにせん」

と書きて、端に、「あとには、問なども、塵のことをなむあやまたぎなる才よく習へとなん、聞えおきたる、と宣はせよ」と書きて、封じて、上に、「忌などはてなんに、御覽ぜさすべし」と書きて、かたはらなる唐櫃にぬざりよりて入れつ。(r) みる人あやしと思ふべけれど、久しくしならば、かくだにもせざらんことの、いと胸いたかるべければなむ。

道綱母の体調は「例のここに違ひておほゆる気色もみゆ」状態になり、「かうしつつ死にもこそすれ」と思われて遺書を記すことになる。この作品においてもつと長期間で深刻な道綱母の体調不良時である。しかし奇妙なのは、それほど具合が悪いこの時に父親や息子道綱がまったく描出されないことだ。上巻康保元年秋における母親の死去の際、道綱母は「足手など、ただすくみにすくみて、絶え入るやうにす」と自分も死にそうだと息子を「引き寄せ」、「われ、はかなくて死ぬるなめり。かしこに聞えんやうは」と今後を言い聞かせており、周囲の人は「いかにせん。なかくは」と「泣き惑」い、父親は彼女に「親は一人やはある。なかくはあるぞ」と気をしっかり持つよう語りかけるさまが描かれていた。それなのに、病が長引き遺書を記すほど容態が悪かったとする当該記事では、家族や身の回りの人について、本文Ⅱ傍線(f)直前から「見聞く人ただならで、芥子焼きのやうなる業すれ」と距離を持って間接的に描くだけである。ここで書かれているのは道綱母の感じる心身の衰えと考えられそうだ。

この遺書で注意されるのは、道綱母と兼家以外には意味を解せない表現が散見されることである。書き出しの傍線(n)「命なかるべしとのみのたまへ」は底本に拠るが、これでは意を取れないとして「命長かるべしとのみのたまへど／＼のたまへば／＼のたまひ」などと改訂されることが多い。「無かる」と「長かる」では意味するところが反対になり、また改訂しても「命は長いだろうとだけおっしゃり」と分かりにくい。前後の内容によっては底本通り解することも可能だと思われる。続く傍線(o)「みえてたてまつりてむとの思ひひ」も難解で、直前の「とのみのたまへ」とこの「とのみ思ひ(つつありつるを)」は対になっているのだろうが、傍線(n)が分からないと読み解けない。ここは当事者性の強い書き方になっている。また、傍線(p)「人にも言はぬことの、をかしなできこえつるも、忘れずやあらんとすらん」も、忘れ難い兼家との思い出について書いているのだろうが、内容が解せず、これも自分と夫以外には理解できなくて良いという表現である。この遺書では後にのこす一子道綱への顧慮を繰り返し頼みながら、夫婦の陸言がそのふたりにしか分からない表現で甘やかに記されている。

遺書なので本人と相手にしか分からないいきわめて内輪な書き方がされるのは当然、として終えることは出来ないだろう。この遺書が実際に読まれる記事として改めて記し直されるのであり、そこにおいても当事者にしか分からない表現で示されるということは、読者には意味が不明でもかまわず、心が通じ合っている夫婦として解されることが意図されていると言える。この遺書には兼家との結婚生活におけるつらさは書かれず、夫との幸せな思い出を述べて夫婦の心の通い合いを表わす記事内容となっていることに注意したい。

またこの遺書には、先に考察した三例に加え、もう一例「惜し」(波線(丁))が存する。「ただ」と続き、ここも「惜しくはないのだが」の意として用いられており、遺書以前の地の文の「惜し」と同様だ。遺書は直前の地の文の心情に沿っていて、地の文に書かれる感情が遺書へつながっていると認められる。

そして、この遺書に二重傍線部「あやしく心細き心地のすればなん」とあることは看過しがたい。先述した兼家の長精進における本文Ⅰの二重傍線部「いとあやしく心細き所になん」と重なるのだ。京を離れて山寺に居る兼家は、「あやしく心細き」「所」と、居る場所についての感慨として述べていて、自邸の道綱母は、「あやしく心細き」「心地」と、心情として表わしている。兼家は、「あやしく心細き所」にいるのだよ」と自らの状況を道綱母に訴えその気持ちゆえに手紙を送るとし、道綱母は「もうこれが限りかと」「あやしく心細き心地」がするので、貴方にこのように書き残すのです」と述べる。これら二箇所ともに、「あやしく心細き」のことを相手に伝え、だから今あなたに手紙を書き送るのだと表わしている。『蜻蛉日記』において「あやしく心細き」の用例は他にない。近いものとして、「くつくつほうしいとかしがましきまで鳴くを聞くにも、「我だにものは」といはる。いかなるにかあらん、あやしくも心細う、涙うかぶ日なり」(下巻・天禄三年八月)があるだけだが、これは自身にも把握できない漠然とした気分を表わし、兼家に伝えようとする感情ではない。正五月における兼家と閏五月における道綱母の「あやしく心細き」という心情は、呼応するメッセージとしてあると言える。そしてこの遺書は、書いた後道綱母自らがしまい、傍線(ㄱ)「みる人あやしと思ふべけれど」と侍女は道綱母の行為を不審に思っているだろうとする。この遺書は侍女が介することのない、道綱母と兼家ふたりだけのものとしてある。

道綱母の病臥の記事は周囲との関わりが希薄で個人的な精神世界と描かれ、そこで道綱母は祈祷などを受けながら夫へ遺書を書くのであり、兼家への思慕の中にいたと表わされている。

五、兼家と道綱母との心の通い合い

以上の考察から、正五月の兼家の長精進と閏五月の道綱母の病臥の記事においては、ともに兼家と道綱母の親密な関係性が表わされていると認められた。ふたつの記事の対応についてさらに踏み込んで考えたい。

道綱母の病臥時、本文Ⅱ傍線（f）「芥子焼きのやうなる業すれ」や、本文Ⅲ傍線（m）「やむごとなき僧など呼びおこせなどしつづつみる」、またその後の記事における「祭・祓などいふわざ、ことごとしうはあらで、やうやうなどしつづつ」と彼女は祈禱や祓いを受け、兼家の「山籠り」と同じく仏神等に護られているとされている。正五月の兼家の長精進と閏五月の道綱母の病臥は、ともに仏神等の加護のもと身を慎んでいた時なのだ。

また、兼家の山籠り記事の正五月は本文Ⅰ傍線（b）「廿余日のほど」、道綱母の病臥の閏五月は本文Ⅱ傍線（e）「つごもりより」とともに月末から書き出されている。そして、正五月のはじめは本文Ⅰ傍線（a）「その前の五月（雨）」と書かれていたためであり、これは「閏月もある場合の、正の月の方の五月」を表わすもので、「その前の五月」と書く時点で「その後の五月」つまり閏五月が意識されていることを意味する。「閏五月」の存在をここで読者に示唆していることは見逃せない。「正五月」と「閏五月」を対にして把握すべきと表わしているのである。正五月の記事は兼家の長精進についてだけ書かれ、閏五月の記事も道綱母の病臥のみが記されていることから、これらが対の関係として存することは明らかだろう。

さらに、閏五月の遺書中の、本文Ⅲ傍線（q）「折しもあれ、対面にきこゆべきほどにもあらざりければ」は、道綱母の具合が悪い時に兼家も物忌で会えないことを表わしており、ふたりの状況の重なりが示されている。閏五月の記事には兼家が長精進中とは表立って書かれず、「折しも」はこの文脈では正五月の兼家の物忌と閏五月の道綱母の病臥が並立していることを表わしている。

このように対応する記事において、ふたりはそれぞれ相手へ愛情の籠もった手紙をしたためたと描かれる。ふたつの記事の違いとして、道綱母の手紙である遺書は結局兼家に読まれないことが指摘されるかもしれないが、道綱母の遺書における思慕の情は兼家へ伝わっていると解し得る。なぜなら、中巻の冒頭年始めにおいて、

…内裏へもとくとて、騒がしげなりけれど、かくぞある。今年は五月二つあればなるべし。

年ごとにあまればこふる君がため閏月をばおくにやあるらん

（中巻・安和二年一月）

とあり、兼家の詠歌として、「今年の閏月は私への愛情を余るほど有している君のために置くのだからかね」とすでに示されていたからである。

和歌に「閏」が詠み込まれるのはきわめて稀である。⁽⁸⁾『蜻蛉日記』成立頃までの管見に入った例としては、『馬内侍集』に、「みそかにもあるべきものを雪ふるに袂のうるふ月のわびしさ」（一九）「しはすふたつありし年、しのびてやみなんまたはな来そといひし人の、閏月はいかがおもふといひたれば」が見出されるくらいで、これは「袂の潤」と「閏月」を掛けた修辭としてある。閏月は和歌では、「さくら花春くははれる年だにも人の心にあかれやはせぬ」（『古今集』六一「弥生に閏月ありける年よみける」伊勢／『古今六帖』二二三五「閏月」・「郭公のちのさ月もありとてやながくう月をすぐしはてつる」（『古今六帖』一三三七「閏月」）などと表わされ、普通「うるふ」の語は用いない。

したがって、兼家が「閏月」を主体的に詠み込み、「閏月」自体を主題として今年存する閏月を意味づけているのはきわめて異例である。またこれが作品に書き込まれたことは、「今年の閏月」が作品において意味を持つと示唆するものであり、実際に描かれた閏五月の記事との関係を読み取る必要がある。この閏五月は兼家によって、「私への愛情をあふれさせている君のために置いたひと月」とすでに表わされていたのであり、閏五月の日々は、夫を恋う道綱母の気持ちの横溢したものと兼家に認められている。従ってそこでの夫への遺書における慕情は、兼家に理解されるものと前提されていると言えるのだ。

正五月の、山寺に籠り「あやしく心細」い所だと道綱母に伝えてくる兼家と、閏五月の、病が長引き「あやしく心細」い気持ちがしてと兼家に遺言を記す道綱母は対になる。兼家がこの正五月二十日過ぎに長精進をした事実がそのままここに記されたとのみ解するのは妥当ではない。この後「廿余日の程に、「御嶽に」といそぎたつ」（安和二年六月）と、兼家が御嶽詣でに出かける六月下旬まで兼家の精進潔斎は続いたはずなのだが、閏五月・六月の記事では兼家の長精進について書かず、正五月のこととして叙されているのであり、正五月と閏五月を対応させる記事構成上の操作が認められる。

安和二年に実際に存した閏五月は正五月と対の関係として構成されており、この二カ月は、兼家と道綱母が日常生活から退き身を慎み

つつとも互いを思っていた時期だったと書かれている。閏月は正の月に付属する月であり、正五月の山寺での長精進という行動に対する、閏五月の病臥や誰にも読まない遺書という内向的なあり方は、閏月の叙述としてふさわしいと言えよう。

平安文学作品における「閏月」については、すでに指摘が存する⁽⁹⁾ように用例が少なく、「閏月」を用いたこのような表現構造はきわめて特徴的なものである。

六、安和の変の直後ということ

この正五月の条(本文Ⅰ)は、三月末の安和の変をめぐる記事に直接するものだった。平安中期最大の政変である安和の変について記した理由を「身の上をのみする」と釈明的に述べた後、当時の日常の文脈へ立ち戻るように最初に舵を切るのがこの正五月の条となる。

安和の変は多くの貴族たちにとって突然の出来事で、政界は大変動した。『栄花物語』に「世の中にいとけしからぬことをぞ言ひ出でたるや」・「いでや、よにさるけしからぬことあらじ」など、世人申し思ふ(『月の宴』)、『大鏡』に「その御事のみだれは、この小一条の大臣のいひいで給へるとぞ、世の人きこえし」(『師尹』)・「いとおそろしく悲しき御事どもいできにしは」(『師輔』)とあり、高明は無罪だったとの認識が大勢で、当時の貴族はこの事件の真相を様々に憶測したと考えられる。事件への関与が疑われる立場にあった撰閲家の一員の藤原兼家がその頃どう過ごしていたか、詮索する雰囲気が当時存したことは想像に難くない。安和の変の記事の直後に何を書くかは、道綱母にとって充分意を用いるべきところだったと考えられる。

安和の変直前にはまったく描かれず安和の変の記事においても触れられることのなかった兼家は、安和の変直後、それも安和の変の「廿五六日のほどに」を想起させるような「廿余日のほど」に、しかし政治的動向とは全く無縁に長精進のための山籠りをしていたと記されるのであり、この条は安和の変という事件と無関係で、事件後の雰囲気塗りを替える記事になっている。「その前の五月雨の廿余日のほど、物忌もあり、ながき精進もはじめたる」「人」と、兼家を表わす「人」以前に長く付された「物忌」「長き精進」についての説明は、兼家という人物と直前の安和の変に関わる政治動向とのつながりを薄くする書き方と言える。またここで兼家は登場はせず、政治権

力の組み替えが生起している京から離れ、山に籠もっているとされるのであり、その山からの手紙として兼家は間接的に描かれるのみなのだ。読者は、藤原兼家は安和の変に関わったのではないか、その後の政治変動において暗躍したのではないかと、の視線で読むときに、肩すかしを食わされることになる。長精進中の身で京から離れ、妻に心細いと言いつつくる存在として兼家は描かれていて、道綱母はその夫へ気遣いと思慕の歌を送り、兼家は「君のもとに降りていくよ」と頼もしく返歌し、気持ちの寄り添った夫婦関係が表わされる。しかし、兼家が山を下りてふたりが逢ったとは書かれない。兼家はこの記事に姿をあらわさず、あくまで山で身を慎みながら道綱母と心を通わせる存在として遠景に描かれる。続く閏五月では同じく月末と表わし、道綱母は体調を崩し日常生活から離れていたと述べて、ほとんど逢えない兼家へふたりにしか通じない恋文のような遺書を記したと描くのだった。

これは直前の安和の変に対する悲嘆の表現とはまったく異なつた書きぶりである。前述したように高明は無実と考えられていたのであり、彼や愛宮に対する同情論が世間では強かつた。道綱母はまずその同情に共鳴し、「悲しと思ひ入りしも誰ならねば」と嘆きを表わしたのだ。これに続く五月の記事との関係を読み解くにあたつては、深沢三千男が安和の変の「身の上をのみする」以降の書きぶりに関して、以下のように論じていることが参考になる。

兼家は直接の担当官であつたかどうかは別として、高明処分に責任を負う立場にさえあつた。すなわちこの弁解は高明への同情を完全に道綱母だけの個人的責任にしてしまう性質のものであり、世間周知の高明の家とのつびきならぬ深い因縁から、記事面での黙殺ができない安和の変関係記事を、このような形で大つびらに本日記に留める事ができ、かくて夫兼家が大つびらに高明への同情を表わし得ず、さりとて縁故深くしかも重恩ある高明の悲境に対して、自家の側に全く心を動かさず者がいなかった冷酷さへのそしりを甘受するわけにも行かぬという、どうしようもないジレンマから、夫兼家ひいては九条家を救い出し、その誉れを守り得たのではないかと思う。^⑩

本稿では、安和の変の次の記事において、兼家がその頃長精進中で京から離れ山籠りをしていと書くことは、安和の変に関して兼家のアリバイを示すものとなると捉える^⑪。そして続けて自らの病臥を記し、夫婦のつながりあいを描出しているのだ。正五月と閏五月を夫婦ともに日常生活から離れて仏神の護りのもと身を慎み相手を想っていた時であると構成することは、政治陰謀とは無縁の日々だったと表わし、兼家に対する読者の詮索と批判をかわすことになる。夫婦が同じような状況にあると対の時空間として形成され、また新婚期を

想起させる表現にもよって夫婦の心の通い合った表現世界が示し出されるこれらの記事は、安和の変と激動する政治状況に絡んだ疑念を挟む余地を与えないものである。

正五月と閏五月の記事は、直前の安和の変による世間の詮索や非難から兼家を守ろうとする表現構成になっているのだが、それは一子道綱を守るものでもあることは強調されなければならない。翌天禄元年に元服することになる道綱のため、父親が貴族社会で白眼視されるような事態はあつてはならないことだった。道綱のためにも、兼家への世間の非難をかわすための記事がここで必要とされたのだと考えられる。

七、おわりに

この閏五月の次は「六月のつごもりがた」と月が替わって、高明の室愛宮への見舞いの長歌をめぐる記事になる。長歌を受け取った愛宮は返歌を時姫へ送るといふ間違いを起こし、慌て当惑している様子を道綱母は聞いて書き付け、「をかしければ」と述べる。日常的で軽妙な社交記事へと表現内容が傾斜していく、安和の変はそこで日常性の中に相対化される。

正五月と閏五月の夫婦の心の通い合いから、六月は外部の貴顕との社交へと記事が開かれていくのである。その次の記事は八月の屏風歌の詠進についてであつて、安和の変という大事件を介しつつそこから離れて、貴族社会における道綱母の社交が広がりをもつて表わされる。当該正五月と閏五月は、安和の変とは無縁な表現世界を構築し事件との無関係性を示して読者の兼家への疑惑と詮索をそらしたのであり、またそれによつて六月に安和の変の被害者愛宮に同情と共感の歌を送ることを不自然ではないと見せ、さらにその長歌をきっかけに安和の変は日常生活の中に相対化される。上巻後半の章明親王との風流な交際や貞観殿登子への見舞い記事などにつながる、和歌を介しての道綱母の社交生活がここで再び描かれるのであり、この後には、天禄三年四月に高明が帰京した際にも、安和の変に触れることはなくなる。

安和の変の記事の直後に選ばれて書かれたのは、五月の山籠り中の兼家の記事と閏五月に病臥する道綱母の記事であり、これは対になつてふたりのつながりを示し、安和の変について兼家の関与を疑う読者の詮索をかわす表現構成となつていたのである。以上の分析か

ら、従来論じられてきた、夫との思うようにならない夫婦関係による嘆きの投影というとは異なる作品の相貌が立ち現れてくると認められる。安和の変という当時最大の政変はこのように注意深く描き込まれたのであり、安和の変の記事がその冒頭近くにある『蜻蛉日記』中巻は、読者に対し意図をもって夫兼家や道綱を示し出すものであるとの視座も有効になると思われる。

※『蜻蛉日記』の引用本文は基本的に『改訂新版かげろふ日記総索引 本文篇』に拠るが、底本の宮内庁書陵部蔵本の本文を採用したところがある。また『大鏡』は『日本古典文学大系』に、『栄花物語』は『新編日本古典文学全集』に、和歌は特にことわらない場合は『新編国歌大観』に拠っている。表記を私に改めたところがある。

註

- (1) 拙稿「蜻蛉日記」中巻の「桃の節句」と「小弓」の記事について——安和の変の直前に書かれたこと——（『日記文学研究誌』二〇一五・六）において、安和の変直前の記事の特徴と意味について考察した。
- (2) 川口久雄校注『日本古典文学大系 かげろふ日記』（一九五七、岩波書店）。
- (3) 今西祐一郎「おなじぬれ」・「いとなきなき手」考（『蜻蛉日記覚書』二〇〇七、岩波書店。初出は『語文研究』（九州大学国語国文学会）二〇〇六・六）。
- (4) 例えば『新日本古典文学大系 蜻蛉日記』では兼家と『新編日本古典文学全集 蜻蛉日記』では道綱母と解している。また『岩波文庫 蜻蛉日記』（一九九六）には「兼家の精進（前節）をさすか。又は道綱母の病氣療養の精進潔斎か」とある。
- (5) この安和二年閏五月末頃に、実際兼家が道綱母を新邸に住まわせることを決めていたかどうかを述べるものではない。
- (6) 『西本願寺本三十六人家集 一』（一九七三、墨水書房）の影印による。
- (7) この部分には「口惜し」も存するが、語も意味も異なるため検討の対象とはしない。
- (8) 大下博子「平安文学作品に於ける「閏月」の語について」（『文教国文学』一九九七・二）は主に詞書の用例を整理している。
- (9) 宮崎莊平「日記文学における時間の問題一つ——「閏月」記載の存否をめぐって——」（守屋省吾編『論集日記文学の地平』二〇〇〇、新典社）。平安朝日記文学には「閏月」の用例が存せず、平安中期までの物語文学としては『大鏡』の「閏四月廿五日、后宣旨かぶらせ給ふ、御年卅九」（村上天皇）など、

歴史的に意味のある日付を記す用例がわずかに見いだせる程度である。

(10) 深沢三千男「安和の変における道綱母の役割について——蜻蛉日記より見たる——」(山中裕編『平安時代の歴史と文学 文学編』一九八一、吉川弘文館)。

(11) 歴史的事実として、兼家が安和の変に加担していたのかどうかはここでは問題ではない。歴史学においても、安和の変の主犯・共犯は誰なのか、いまだ定説をみない。

〔付記〕 本稿は日記文学会の蜻蛉日記分科会での担当箇所輪読・研究発表をもとに成稿した。メンバーから多くの意見をいただいた。